

認知症の人の意識活動に寄り添う過程

The accompany process with conscious activity of the Alzheimer's diseased

喜多 祐 荘

Masaharu KITA

認知症（とくにアルツハイマー病）の人の欲求の実現のために、その支援者（寄り添い人）が、認知症の人の意識活動を洞察し、その自己再生・自己表現・自己実現に寄り添う方法を設定し、認知症の人に寄り添う過程を明らかにする。まず、事象を通して問題の所在とその解決の切口を見出した。つぎに、人の意識活動における「純粹自己」と自他の「共同世界」の成り立ちを考え、認知症（アルツハイマー病）の人の場合を推察した。これをもとに、共感的記憶会話同伴銘記法を応用した、アルツハイマー病の人の事例を検討した結果、認知症の人の純粹自己の意識活動に寄り添う過程を明らかにすることができた。

キーワード：認知症 アルツハイマー病 純粹自己と共同世界 共感的記憶会話同伴銘記法 寄り添う過程

はじめに

本稿は、認知症（とくにアルツハイマー病）の人の欲求の実現について、その支援者（寄り添い人）が、認知症の人の意識活動を洞察し、その自己再生・自己表現・自己実現に寄り添う方法を設定し、認知症の人に寄り添う過程を考えようとする。

なお、本文中の事例については、対象となる本人・家族の同意を得、公表においては個人を特定する記述がないことを約束し、了解を得た。

I 本人の心の叫びに寄り添う（問題の所在）

筆者が体験したアルツハイマー病の人との惜別について振り返って、本人の想いを考えることにより、問題を明らかにし、あらためて本人に寄り添って支援するための糸口を見出した。

I-1 ある人の悲劇

筆者は、アルツハイマー病を持つ人と数年の関わりを続けてきたが、その人が遭遇した不慮の死に接し、惜別の情と無念の思いに明け暮れている。

その人（以下、本人とも）が、病の進行のなかで、自分の中に湧き起こる生家への帰郷の思いに駆られて自宅を飛び出すことが続いた。本人はその身の安全に苦慮した家族が依頼した病棟の中にいた。1ヶ月余りのち、本人は夜間に外出し、翌日数キロメートル下流の川辺に倒れていたのを発見された。眠さと寒さが伴った死亡であろうと推測された。

I-2 本人の想いを考える

本人は、自分の家族の許へ帰りたい一心で、機をみてそれを実行したものと思われる。筆者らが悔やまれるのは、早くに本人の想いを受けとめて本人の切実な気持ちに触れていなかったことである。

本人の気持ちと願いに真剣に向き合っていれば、今回の悲劇は避けられたのではないかと。では、どうすれば本人の心に私たちは寄り添えるようになれるのか。このことを考えることに、本人の願いを実現する（悲劇を防ぐ）切口があるのだと考える。

I-3 問題の所在（共感的記憶会話）

本人は、閉鎖病棟のなかで、日々自問していたのであろう。「ここはどこだ、私とどういふかわりがあるのか。私は今いくつだ、私はだれと関わりがあるのか。いまは何月何日だろうか、私は何をすべきなのか。」そして「自分はなぜここにいるのか知りたい。」という要求に駆られていたのではないかと。本人が「見知らぬ場所・日時・人々の意味」を確認しようと願いながら、孤独に戸惑っている姿に対して、私たちが寄り添って、本人の記憶再生を促がし、本人が自己像と他者との関係を特定し、現前の状況を解釈し、本人が納得できる答えを持ちえるように共感的記憶会話をする必要があったのである。

ここから、筆者は、本人たちの純粹自己（本人の内面から湧き出てくる自己像・時代像・世界像・家族像と関係像・役割像・欲求課題・意志目標）の様相を明らかにすることができれば、寄り添い支援（ソーシャルケアワーク）の糸口を見出せると考えた。

II 方法本人の渴望を満たす意識活動への支援 (自分と他者の共同課題)

本稿の研究方法は、われわれが日常体験している意識活動をもとに、記憶に制約を受けたアルツハイマー病の人(本人)たちが体験する意識活動の間(やみ)と光(ひかり)を洞察することである。すなわち、本人が持ちえる純粋自己の諸相を明らかにし、本人の意志にもとづく投企を受けとめることにより、本人と私たちの共同世界を作ることができる。

II-1 本人の意識活動の個別性 (純粋自己がつくる共同世界)

ここでは、「純粋自己」の特性、他者との出会い、自己と他者の共同世界の成立を概観する。

(1) 「純粋体験」の中の「純粋自己」

筆者自身を省みると、自分の「身体」と「自己」がこの世界で唯一であり、かつ、自分の「身体」と「自己」が経験している「世界」が唯一自分だけのものであり、この「世界」の中心にいるのが唯一自分ひとりである、という体験を持っている。一体、己(われ)は何者かという疑問が生じた。

どうしてこのような不思議な体験が生まれるのか。

・・・それは、人が「自分だけの世界を経験(純粋経験)」し、「自分だけの世界の中にいる自己(純粋自己)を認識」しているのは、人の経験と認識が「その人固有の身心と意識」の働きによるものであるからである。・・・筆者がこのことを確信しえたのは、他者の感動と温もりを実感しつつ、その人が筆者と同じように「その人だけの世界を経験」し、「その人だけの世界をその人ひとりで認識」していることを直感したことによる。

(2) 自他の共同世界(世界-内-存在)

つぎに、純粋自己は、特定の他者の存在が関心事になる。この他者が自分に関与するか、自分がこの他者に関与することにより、この他者も、純粋自己の「世界-内-存在」となる。

例えば、20歳の青年(若者・乙女)が、相手を見初めた瞬間、過去の記憶にはない存在となり、大切な存在として記憶され、これからも逢いたいと願う存在となる。この相手は純粋自己の「世界-内-存在」となったのである。しかし、相手が自分に全く無関心であれば、相手は純粋自己の「世界-内-存在」であるとは幻想に過ぎない。相手が自分に関心を持ってくれたときにはじめて、相手は純粋自己の「世界-内-存在」として実在することになる。ここで自他の共同世界(世界-内-存在)が成立するのである。

(3) 「純粋自己」がつくる「共同世界」

ここで「純粋自己」とは、人が自己の体験の記憶にある「自己像・時代像・世界像・家族像」の中に、今ここにある自身の「感覚・感情・予感・期待」と現前の他者の「属性・関係・役割・意志」を織り込んで、自己と他

者の「共同世界」をつくり・保持しつつ、共同意志を形成し・実行し、その成果に感動し・銘記する働きの主体である、とする。

II-2 認知症の人と心の絆を結ぶ窓口

私たちは、相互に心を通わせあい、共感したり憎んだりして、協力したり排斥したりする、心をもった存在である。

ところで、私たちは今しがた(少し前)の記憶が無いと、自分が話していることや行っていることの継続性を確認できなくなり、一貫した会話も行動もできなくなる。つまり、一貫した意思の働きを保てなくなり、話し合いによるお互いの気持ちの確認も共同作業も出来なくなる。つまり、記憶が無い(短期記憶が作られない)ということは、自分が今何をしつつあるのか、相手が何をしているのか、自分と相手が一緒に何をしているのかが分からなくなることである(自己像・相手像・関係像の欠如)。

記憶形成不全という障害をもつ人が、「自分が今何をしたのか? また、ここはどこなのか? 目の前の人(誰)なのか?」が分からなくて、不安になり、孤独になっている」姿を見たとき、私たち観察者は、その人の存在が恐ろしく思われる。それは、そこに私たち自身の可能性を見ているからである。

他方、同じ人が「自分の馴染みの世界を思い起こしてそれを語ってくれている」姿を見たとき、私たち聴聞者は、その人の存在に親しみを感じる。それは、その人が私たちと心通い合っているからである。

ところで、本人が私たちを、「幼な馴染みのAさん」と思うとき、私たちが本人の解釈をそのまま受けとめることが出来れば、そこを窓口にして、私たちはその人の世界に入っていくことが可能になる。会話者である私たちが本人の馴染みの世界に入り、会話・共感・同伴をくりかえすことにより、本人と私たちが「新たな馴染みの関係になる」ことが出来る。

筆者らがこの新事実を発見するに至った、とりくみの過程はつぎのとおりである。

1. 逆向性記憶障害(アルツハイマー病)の人の心を理解し支持する視点 [仮説]
(「痴呆性高齢者の心理・社会的な理解と共生のアプローチ」)¹⁾
2. 逆向性記憶障害(アルツハイマー病)の人の馴染みの世界に入る方法 [計画]
(「こころの旅路・・・共感的関係形成」援助研修マニュアル)²⁾
3. 逆向性記憶障害(アルツハイマー病)の人の馴染みの世界を表現してもらう実践 [実践]
(「認知症の人と家族への支援」)³⁾

これらの仮説・計画・実践の過程をへて、つぎの「認知症の人と馴染みになる」実践研究につながっていく。

II-3 認知症の人の自我の働きと共感的関わり⁴⁾

- (1) 認知症の人の「自己と環境を統合する」働き

アルツハイマー病（逆向性進行性記憶消失を主な特徴とする）の人たちは、自分と環境を結び付ける自己の働きを豊かにもっている。本人と隣人（家族・友人・援助者・住民など）が相互に分かり合いながら生きていくためには、この自己の働きを活発にし、本人の意識する環境、本人の他者への解釈、本人の心身の感覚、本人の欲求の存在を、そのまま、隣人が受け入れる必要がある。

私たちは、本人が、日常どのような心の働きを営んでいるかについて理解することが求められる。そこで、私たち人がもつ「自己の働きによる『統合活動』」についてみてみたい。

過去と現在の統合

状況と自己と他者の統合

自己の「輻輳する欲求」の統合

自己と他者の「相または反する欲求」の統合

「欲求主体」と「環境条件」の統合

「現在」と「未来」の食い違いの統合

生気を取り入れて成長する「美」と燃焼して廃棄される「醜」との統合

「生」と「死」の統合

人生の「生きがい」と生涯の「終幕」の統合

「死ぬ人」と「生き残る人々」との統合

などがある。

ここでは、「過去と現在の統合」、「状況と自己と他者の統合」および「欲求主体と環境条件の統合」に限って、人の意識活動をみていく。

「過去と現在の統合」について

人も物も事物は一瞬たりとも同じところに止まることは出来ない。「この瞬間」（現事象）はそれが人に認識されたときに既に過去になっている。そして私たちは「次の瞬間」（次の現事象）に直面している。これが認識されたとき既にこれも過去になり、私たちは「その次の瞬間」（その次の現事象）に入っている。ではなぜ私たちは、「その前の事象」と「直近の事象」と「眼前の事象」を同一事物の連続した流れとしてとらえることが出来るのか？・・・その秘密は私たちの記憶の働きにある。

私たちは今ここに居ながら、直近の今ここを覚えており、同時にその前の今ここも覚えていて、それら一つの事物の変化と認識している。もしもこのとき、記憶が働かないとすれば、私たちは眼前の一瞬をのみ見ており、したがって、事物が一貫して存在しつつ、変化しつつある、とは、意識できないであろう。

ところで、認知症の人にも、記憶による事物の変化を「動き」として感じ取る能力は備わっている。

「状況と自己と他者の統合」について

記憶の働きにより「状況」を「動き」として感じ取り、「自己」の動きと「他者」の動きがその「状況」の中に貼り付くと、「状況の中に在る自己と他者」の絵の連続写真が出来あがる。その結果、「状況の中で自己と他者が躍動する映像」を観ることが出来る。記憶の働きがな

く、眼前の一瞬の「状況と自己と他者」の絵を見るだけでは、その絵の中で「状況と自己と他者がそれぞれ点在している」のが見えるだけとなり、私たちは「状況と自己と他者の関係」を認識することが難しい。

認知症の人には、眼前の事象の変化の連続写真が記憶の働きにより観えている場合と、記憶の支えが欠けていることにより連続写真が成り立たない場合とがある。後者の場合、その人は事象の変化の「状況と自己と他者の関係」（相互の関わり合い）を読み取ることが出来ない。

「欲求主体と環境条件の統合」について

記憶の働きにより自己と状況、または自己と他者の関係を認識することが出来ている場合、自己が何かを欲したときにそれを支えてくれる周りの条件を見出すことが出来る。しかし、記憶の働きがなくて、自己と状況、または自己と他者の関係を読み取ることが出来なければ、欲求をもつ自己を支えてくれる条件を見出すことも困難になる。認知症の人が、短期記憶が働いていない場合、まさにこのような境遇に陥っている。

それを克服するには、本人の中に遺されている長期記憶細胞に蓄えられている「記憶内容」を蘇らせ、その連続映像の中に現前の事象を貼り付けることにより、遺存記憶による「状況の中に在る自己と他者」の連続写真が見えて、「状況の中で躍動する自己と他者」が観て取れ、「状況と自己と他者の関係」（相互の関わり合い）を読み取ることが出来る。

その発展形態として、「欲求をもつ自己を生かしてくれる条件を見出す」ことが可能となる。ここでようやく、認知症の人も、「欲求主体」と「環境条件」の統合が可能となるのである。すなわち、認知症の人の「自己と環境を統合するはたらき」を支えているのは、本人の中にある「長期記憶の蘇り」なのである。

この「長期記憶の蘇り」が持続していれば、同時に遺存記憶細胞の働きと連結している短期記憶細胞の働きが活動しはじめる、と考えられる。

（参照：喜多祐荘：痴呆性高齢者の心理・社会的な理解と共生のアプローチ、東海大学健康科学部紀要第5号、1999）¹⁾

(2) 純粋自己との共感的記憶会話の関わり

現象学的共主観（純粋自己がつくる共同世界）は、本人と相手のそれぞれの主観（純粋自己）が共有されている状態である。つまり、一方の人が自己の内部から生みだす感覚・映像・価値・意思が他方の人が自己の内部から生みだすそれらと通じあっている状態である。

その前提として、甲の人と乙の人が、自分たちをとり囲む自然界が共通であること（「自然界の中で甲と乙が共に活動していること」）を実感し、次に、甲の心身と乙の心身が実在していること（「それぞれの心身が活動していること」）を実感し、さらに、甲と乙の共同意思が存在していること（「双方の意思の中に甲と乙の欲求が一致して共同意思として働いていること」）を実感し

ている。

認知症の本人と相手方である同伴者との間で、環境が共通であること、心身が実在していること、意思が存在していること、それらを実感することを「共感」とする。つまり、両者の認識対象が共通の時代・場面・関係を保っていること、両者の感覚・感情が息づいていること、両者の思想・意思が一致していること、すなわち、本人と私たちの環境認識、感覚・感情および思想・意思の一致が「共感」の特質である。

このことにより次のことが言える。

私たちが認知症の人々と「共感的記憶会話の関わり」を成立させるために、次の三つの視点が必要である。

隣人である私たちの方から、認知症の人の純粹自己がもつ固有の「時代像・環境像・家族像・自己像・役割関係像」の世界に入っていくことによって、本人固有の環境認識（今ここ）の共有が出来る。

隣人である私たちの方から、認知症の人の純粹自己がもつ固有の「身体と心情」の感覚・感情を受けとめることによって、本人固有の心身の実感（己（わ）れは何者か）を感じ取ることが出来る。

隣人である私たちの方から、認知症の人の純粹自己がもつ固有の「思想・意思」の価値観・指向性を支持することによって、本人固有の欲求の存在（誰と何を創るか）を感じ取ることが出来る。

（参照：喜多祐荘：記憶障害（健忘症）の人への援助技術、こころの健康 16-2、2001、日本精神衛生学会）³⁾

III 本人の心の働きに寄り添う（自己の支持）

ここでは、上記「共感的記憶会話の関わり」のための三つの視点を軸に、本人の自己表現、本人の関係形成、本人の自己実現、本人の馴染みの世界形成（長期記憶の新たな形成）について見ていく。

III-1 認知症の人の長期記憶の蘇りを促す

（共感的記憶会話同伴銘記法）

実践事例に用いられる共通の方法は、

- 自己確立の記憶再生
- 関係解釈の受容同伴
- 感動体験の銘記維持

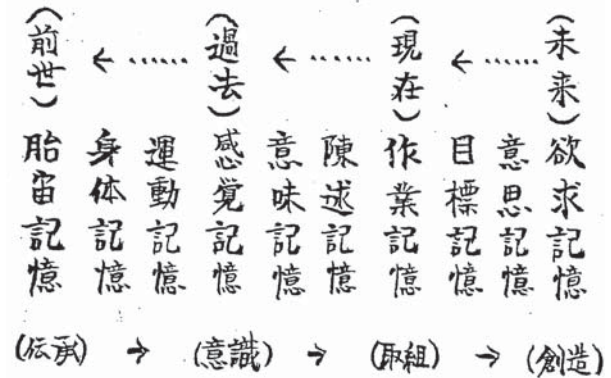
である。以下にこれらの方法の特質について述べる。

私たちは、多様な記憶の働きもっている。

（図1 記憶の働き、参照）。

このうち「胎宙記憶」は胎児期、母とともに暮らしているときの体験で、本人に深く刻まれたもの。「身体記憶」「運動記憶」「感覚記憶」は、意識発生の基盤となる器官に関わるもの。「意味記憶」「陳述記憶」「作業記憶」は、外界との関わりを通して蓄積されたもの。

「目標記憶」「意思記憶」「欲求記憶」は、未生（みしょう）のものをこれから創り出そうとしているときに持続するものである。すなわち、「欲求・意思・目標記憶」



（図1 記憶の働き）

が始動することによって「作業・陳述・意味記憶」が呼び起こされ、併せて「感覚・運動・身体記憶」が作動し、基盤の「胎宙記憶」が振動している。

「自己確立の記憶再生」のために、会話者が本人（記憶障害）の懐かしい存在と世界を質問する（言葉によって本人の映像について語りかける）ことにより、本人に遺存している長期記憶細胞の中から、該当する映像・音曲・文字・言葉などの記憶内容が蘇って出てくる。

通常、質問する言葉（音声・言語・意味）の手順は次のとおりである。

- あなたの名前、生年月日、生まれたところは？
- あなたのお父さん・お母さんの名前、仕事は？
- あなたが入学した小学校の名前、担任の先生の名前・学校の場所・学校と家の距離はどのくらい？
- 小学校時代、楽しかった重いは？
- 小学校卒業後の学校・仕事は？
- ・・・（続く）・・・

これを聞いた本人は、相手に答えようとして、質問の言葉に見合った内容を記憶細胞（長期記憶の蔵）の中から探し出してくる。「質問 応答」のくりかえしの過程で、本人の再生映像が充実してくると、自ら映像再生や音声再生や感覚再生をしはじめ（連想）、詳細内容の再生（映像・音声・意味や感情・動作・欲求）までもが自発的に行われるようになる。

（参照：喜多祐荘「こころの旅路・・・共感的関係形成（援助研修マニュアル）」、『痴呆性高齢者の記憶再生による生活共生の援助技術』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基礎研究(B)(2)）研究成果報告書14310097）²⁾

アルツハイマー病の人の場合は、馴染みの関係になる前（本人が初対面と思っている期間）は、上記の質問の手順を最初からくりかえすのが、効果的である。馴染みの関係が成立したあとは、本人の方から、相手に向かって、役割関係を判断し、それに基づいて質問したり、誘ったり、話しかけてくれるようになることが多い。

（図2 回想と統合の流れ、参照）

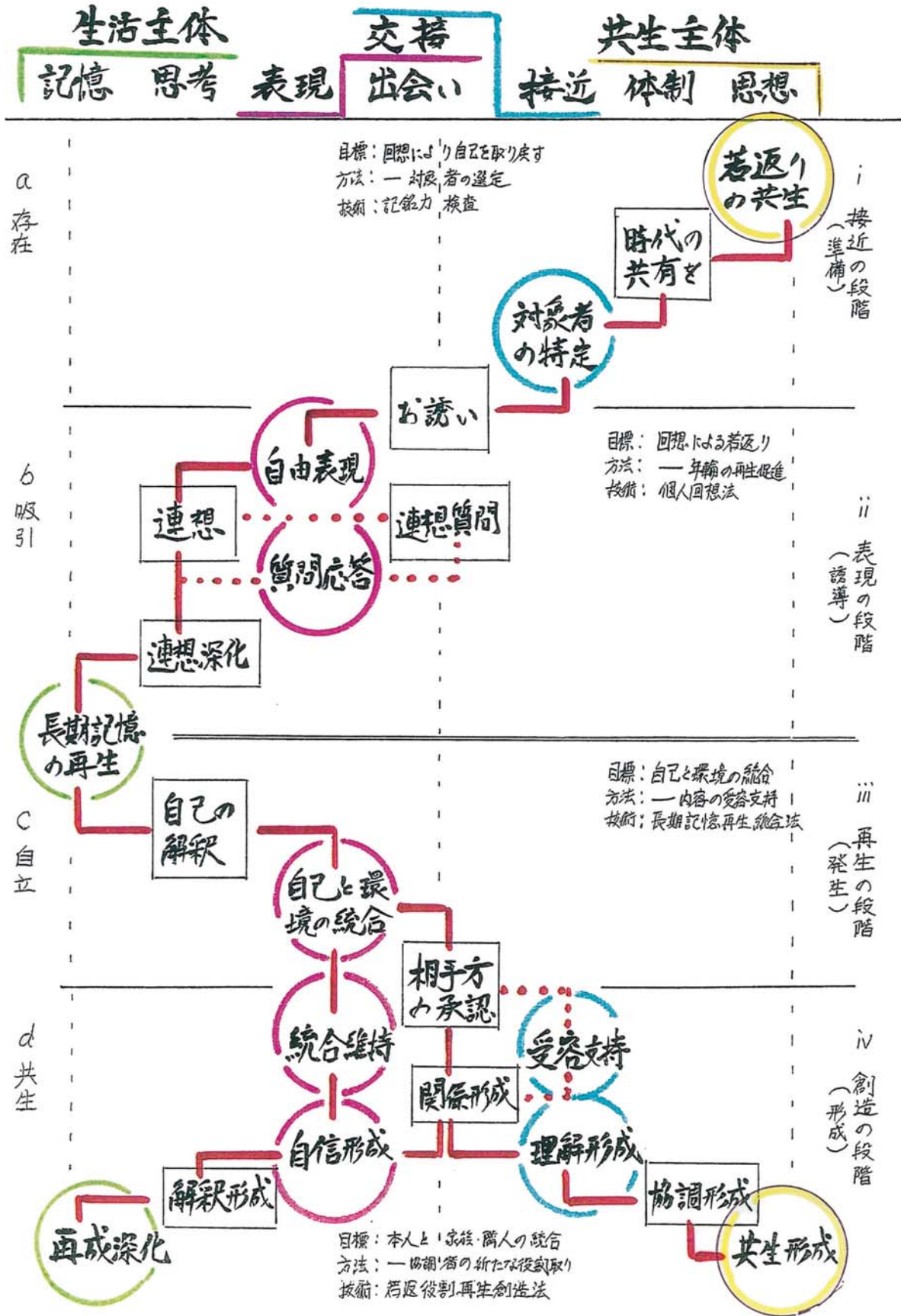


図2 回想と統合の流れ

出典: 喜多祐荘「こころの旅路...共感的関係形成(援助研修マニュアル)」、『認知症高齢者の記憶再生による生活共生の援助技術』科学研究費補助金研究成果報告書(14310097)、2005、55頁

3-2 記憶会話同行銘記法の応用事例⁶⁾

上記の共通の方法を用いた事例を、「本人の世界」、「会話者とのかかわり」、「会話者による心の交わり」の順に見ていく。

なお、事例ごとに、性別、年齢、医学診断、発症年齢、入所時年齢の順に記す（診断名は原文のママ）。

事例1 女 91歳 アルツハイマー型認知症 発症推定

84歳？ 入所時84歳

本人の世界：いま、女学生、親と暮らしている。好きな人と会えるのが楽しい。

会話者とのかかわり：2回目、会話者に飛びつく。信頼している。自分が「女学生」で相手は「旦那」と話す。

会話者による心の交わり：本人にとって相手が特別の存在。本人の本心を受け止めて全身全霊で守ってあげたい。心の交わりが深まる。

事例2 女 89歳 アルツハイマー型認知症発症推定83歳？ 入所時88歳

本人の世界：「もう定年だからね、いまは踊りをしたいよ」（70歳まで働いていた）。

会話者とのかかわり：2回目、馴染みに。「あなたのこと好きなよ、一緒になれたらいいのにな」生きがいは「民謡を教えたい」と話す。

会話者による心の交わり：本人の相手への好意を受けとめ、本人とともに民謡を楽しんだことが好印象になり信頼感が深まった。

事例3 女 91歳 老人性痴呆症 発症60歳頃から認知症症状と思わしきものあり 入所時84歳 帰宅願望が強かった

本人の世界：現在、教員をしており、ここは学校「自分の役割をしっかり行う」が信条。

会話者とのかかわり：面談しながら、会話者を「学校の同僚」と認識して、仕事（おしぼりづくり）を上手にできるように励ましつづける。5回目に馴染みになれた。

会話者による心の交わり：面談しながら、「同僚」であることを受け入れて、「おしぼりづくり」を真剣にしたことが強い印象に。

事例4 女 92歳 アルツハイマー型認知症(重度) 発症推定86歳？ 入所時86歳 帰宅願望が強かった すでに重度の認知症

本人の世界：戦死した夫の思い出。ここはどこかわからない。自宅がある町へ帰りたい。

会話者とのかかわり：定期的に歌ったりして一緒にすごしたのが、本人の感覚・感情の刺激に6回目に「覚えてます」（あなたのことを）、7回目に「久しぶりですね」、8回目も同様。

会話者による心の交わり：本人の夫への思いを受けとめて、本人がいまやりたいことを支持して同行したことが嬉しかった。

事例5 男 82歳 アルツハイマー病の初期段階 70～71歳頃 自宅(妻と二人) 最近時々帰れなくなる 本人の世界：いま、50歳位。本業の畑を見て回るのが日課。

会話者とのかかわり：7回目、顔馴染みに、11回目「よくみる顔だな」、「先生の娘さんだね」（先輩セツラー「先生」の娘と解釈している。）

会話者による心の交わり：会話者が同調すると喜び、家族（妻や長女ら）にも優しくなれる。スキンシップにより会話者と本人の間にリラックスした空気が流れる。

IV-3 事例における本人と会話者の意識活動

これらの事例において、対象者本人と会話者の相互関係における意識活動の共通点のみをみる。

(1) 「本人の世界」について

会話者が、対象者本人の心の世界に入っている
(対象者本人の主観の確信)

本人の外観をみるのではなく、その純粹自己（自分の身体・感覚・感情・認識・意志）に注目する

対象者本人は、自分自身の若返った時代に生きている
(自己像・世界像の若返り)

本人は純粹自己に蘇る自己像・時代像・世界像・家族像を信じている

(2) 「会話者とのかかわり」について

対象者本人は、最近の記憶内容と現前の事象を結び付けている（自己の時代像への位置づけ）

本人はみずからに蘇る記憶内容を時系列に従って並べ替え、その中で最近の内容と現前の事象とを繋げている

会話者が対象者本人の解釈を受け入れている

(対象者本人の解釈の受容)

本人は若返っている自己像を基に時代像・家族像・学校像・仕事像・相手像を考えている

(3) 「会話者による心の交わり」について

対象者本人と会話者が特定の役割関係を保持している
(対象者本人の役割関係の受容)

本人は自己像にもとづいて自分と相手の役割関係を特定し、会話者がそれを引き受けて、相互にその特定の役割関係を信じている

対象者本人と会話者が互いに相手を見、話し合い、触れあい、同行するという実感的な「世界-内-存在」である（対象者本人の世界の中で共に生きる）

本人は相手を自分の馴染みの人であると信じ、話の糸口を見つけ、心を通わせ、行動を共にしたいと願っている

これらのことが明らかになった。

ここにみられる会話者の意識活動の態度は、会話者みずからの純粹自己を見つめ、同時に対象者本人の純粹自己の世界に同伴しようとするものである。

IV 本人の意識活動に寄り添う過程 (純粹自己 共通世界 長期記憶形成)

前述の、共感的記憶会話同伴銘記法を用いた「事例」における、本人と会話者の相互関係における意識活動の過程を整理する。

「認知症の人の意識活動に寄り添う過程」

- 1 外観を停止して本人の内観に注目する
(超越論的還元)⁸⁾

対象者本人が虚脱状態にあるときは、自己の確立ができていない状況なので、その現象を棚上げ(判断停止)して、本人の純粹自己(自分の身体・感覚・感情・認識・意志)に注目すること。

- 2 会話同行者みずからが外在をやめて内観する
(超越論的間主観)⁹⁾

会話同行者みずからが自分の既成観念を棚上げ(判断停止)して、自分の純粹自己を働かせることにより、対象者本人の純粹自己に触れることができる。

- 1 本人の感覚を刺激して実感しやすくする
(接触的快感)

本人の体験と記憶にある五感刺激物(花鳥風月山水園工)を用いて実感を高めるようにする。

- 2 会話同行者みずからが感覚を味わい実感する
(共振的快感)

会話同行者みずからが対象者本人が体験した五感刺激物を追体験する。

- 1 本人が直面している事象の認知を促す
(事象の解釈)

本人の体験と記憶を蘇らせて現前の人や物を解釈できるように促す。

- 2 会話同行者みずからが事象の意味を確かめる
(本人の解釈の把握)

会話同行者みずからが、本人の記憶と解釈に耳傾けて本人の真意を受け止める。

- 1 本人が体験した長期記憶の想起を促す
(体験に基づく記憶想起)

本人の幼年期・青年期・壮年期の時代体験を順次思い出して語ってもらう。

- 2 会話同行者みずからが本人の体験内容を学ぶ
(体験内容の把握)

会話同行者みずからの各時代体験を思い出すと共に、対象者本人の時代体験を学ぶ。

- 1 本人が他者との関係を解釈し役割をとるのを促す
(関係解釈と役割特定)

本人の現前的人物を、若返っている自己像と比較して特定していることを受け止める。

- 2 会話同行者みずからが本人による関係解釈と役割要請を引き受ける
(関係・役割の引き受け)

会話同行者みずからが、対象者本人の関係解釈を受け入れ、その役割期待を引き受ける。

- 1 本人がみずからの要求を課題にするように促す
(自発的課題の表現)

本人の自発的会話を促すことにより、自分の強い想いを表現しやすくなる。

- 2 会話同行者みずからが本人の課題を支持する
(自発的課題の支持)

会話同行者みずからが対象者本人の課題遂行に協力する。

- 1 本人が同伴者とともに課題を実行するのを助ける
(課題の実行)

普通の課題を大事にする本人を尊重する。

- 2 会話同行者が本人とともに課題の実行がうまく行くように周囲に働きかける
(課題実行に共働)

会話同行者みずからが本人の想いを大切にし、周囲の協力を本人に結びつける。

- 1 本人が実行の成果を確かめ感動し馴染みの世界を作るのを助ける
(感動と馴染みの世界)

本人が自分の成果に満足し友情の輪を作る。

- 2 会話同行者が本人と感動を共にし語らい馴染みの世界を確認する
(感動と馴染みの世界に同伴)

会話同行者みずから本人と共に活動の成果を確かめ喜び、共に新たな馴染みの関係になる。

このようにして、本人と同伴者が共感的に会話同伴し、感動を銘記し、新たな馴染みの世界を保持することができることが分かった。

むすび

認知症の人と会話同伴者が記憶を基に会話し、活動し、新たな馴染みの世界を作り保持することが出来ることが分かった。その過程を纏めることができた。

しかし、家族をはじめ隣人が本人と常時寄り添うことは不可能である。その間に、本人の単独行動が起き、それが事故に繋がっている。

この痛ましい現実を解消するためには、本稿で紹介した共感的記憶会話同伴銘記法をはじめとする、寄り添いの技術を身につけた人々が各地で養成されること、および、地域の中で本人たちを人々が交代で見守り同伴できるような人的・技術的体制づくりが必要である。そのために、

認知症の人の心の世界を理解し、その不安に応え、共同しつつ対応を提案できる人の養成

本人と寄り添い人が共に活動できるように、地域・施設・家庭における自然・生活・文物の環境の設置

上記の人と環境を中学校区規模ごとに常設する体制の整備(施策・予算・運動・交流)

これらの課題に取り組む必要があると考えられる。

注

- 1) 喜多祐荘「痴呆性高齢者の心理・社会的な理解と共生のアプローチ」 東海大学健康科学部紀要 第5号 1999, 19-28
- 2) 喜多祐荘「こころの旅路・・・共感的関係形成(援助研修マニュアル)」、『痴呆性高齢者の記憶再生による生活共生の援助技術』平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基礎研究(B)(2))研究成果報告書 14310097, 31-56
- 3) 喜多祐荘「記憶障害(健忘症)の人への援助技術」こころの健康 Vol.16 No.2, 2001, 55-66
- 4) 認知症老人の依存能力開発援助技術研究会『認知症の人との馴染みの関係をつくる』平成16年度-18年度財団法人みずほ教育福祉財団助成研究報告書、2007, 7-10
- 5) 喜多祐荘「認知症の人の長期記憶形成の生活支援過程」介護福祉教育第14巻第1号、2008, 63-68
- 6) 認知症老人の依存能力開発援助技術研究会『認知症の人との馴染みの関係をつくる』平成16年度-18年度財団法人みずほ教育福祉財団助成研究報告書、2007, 10-11
- 7) 「現象学」は、われわれの経験の無偏見的な記述を追究し、「現象学的理解」は、われわれに提示されてくるすべてのものをそのまま受け取ること(現象学的分析の原理)。(千田義光:「現象」、現象学事典、至文堂、1994, 120-121、より)
- 8) 「現象学的還元」とは、われわれが信じている諸事象や世界を「括弧に入れる」(判断停止)ことにより、「純粹意識」(超越論的意識)の領域が残ること。(渡辺二郎:「現象学的還元」、現象学事典、至文堂、1994, 125-128、より)
- 9) 「超越論的間主観」とは、個人の内在的主観と他者の内在的主観とが「共有の世界の内」で交流している(世界-内-存在)こと。(竹田青嗣:「間主観性の考え方」、現象学入門、日本放送文化協会、1989, 22、において、個人の超越論的主観から他者との「間主観」にいたる道筋を図示している)

参考文献

- 1) 室伏君士:老年精神疾患へのアプローチ、金剛出版、1993。(アルツハイマー病の神経生理と症状を説明、そのなかで、遺存記憶細胞が健康であることを教示)
- 2) 竹田青嗣:はじめての現象学、海鳥社、1993。(人の認識の内容分類、超越論的還元による純粹自我、現象学的「共主観」について説明)
- 3) 哲学原典資料集、東京大学出版会、1993。(哲学書(現象学を含む)の抄出による紹介)
- 4) 山鳥 重:記憶の神経心理学、医学書院、2002。(記憶の現象学、記憶の種類と障害、記憶の心理構造などについて)
- 5) コンラート・マウラー、ウルリケ・マウラー。新井公人監訳、喜多内・オルブリッヒゆみ、羽田・クノーブラオホ眞澄訳:アルツハイマー、保健同人社、2004。(アルツハイマーの生涯とアルツハイマー病の発見について)
- 6) メイヨー・クリニック。諸治隆嗣訳:アルツハイマー病、法研、2005。(アルツハイマー病の原因、経過、治療、介護について)
- 7) 喜多祐荘:認知症の人の心を知る(上・下)、おはよう21 2006.1・2(アルツハイマー病の人の記憶細胞消失に伴う「若返り」心象、体験による記憶にもとづく会話表現を促す技法、感覚や環境を整える技法、役割発揮と馴染みの関係づくり技法について)
- 8) NHK福祉ネットワーク編:ここまでわかった認知症、旬報社、2008。(軽度記憶障害、ピック病、レビー小体病、アルツハイマー病の原因・症状・対応について)
- 9) 水谷 仁編:Newton ムック ここまで解明された脳のしくみ、ニュートンプレス、2008。(脳の仕組み、記憶のはたらき、感情のはたらき、アルツハイマー病の治療薬について)
- 10) 竹田青嗣:知識ゼロからの哲学入門、幻冬舎、2008。(西洋哲学の流れと現象学について)

謝辞

本稿作成に当たり、実践研究にご協力いただいた当事者・家族・施設関係者、(財)みずほ教育福祉財団、東海大学健康福祉学部社会福祉学科の職員・学生の方々(ほたるセルツメント)に深くお礼申し上げます。

(2008.11.21)